

## 西田幾多郎と「模倣」の問題——タルドへの小さな言及の波紋

合田正人（明治大学）

フランスの社会学者ガブリエル・タルド(1843-1904)は、あたかもエミール・デュルケム(1858-1917)との論争に敗れたかのように、フランスにあつて長きにわたっていわば煉獄に遺棄されていた。そのタルドを甦らせたのはジル・ドゥルーズの『差異と反復』(1968)であった。一方、日本の思想界に目を向けると、『ガブリエル・タルド——贈与とアソシアシオンの体制へ』(洛北出版)の著者、中倉智徳が言っているように、タルド社会学は、1900年にタルドの講義を聴講した米田庄太郎(1872-1945)によって日本に導入され、1923年から25年にかけて風早八十二(1899-1989)らによつてタルドの『社会法則』『未来の断片』『模倣の法則』(抄訳)が邦訳された。夏目漱石、北一樹もタルドに言及しているとあるが、哲学者では戸坂潤が『イデオロギーの論理学』で、和辻哲郎が『倫理学』でタルドを語っている。因みに、管見によれば、田辺元はデュルケムには触れているがタルドには触れていない。

西田は同僚であった米田からタルドやジンメルについての知識を得たのかもしれないが、1920年の『意識の問題』以降タルドに持続的な関心を寄せ、『模倣の法則』『社会法則』に加えて、『モノドロジーと社会学』、更には『普遍的対立』をも読んでいる。とはいえ、タルドの何がかくも西田を引きつけたのか、タルドのいう「模倣」(imitation)や「無限小」〔極微〕(infinitésimal)を、そしてまた、デュルケムとの論争を惹起したタルドの「社会」観を西田がどう解釈したのかはいまだ明らかにされていないように思われる。しかし、例えば「歴史的世界に於ての個物の立場」を読む者は、西田がデュルケムとタルドの対立をいわば止揚しようとしていたことに気づくだろう。しかもその際、次の一節が示すように、「矛盾的自己同一」など西田の鍵概念とタルドのいう「模倣」や彼の「モノドロジー」が結びつけられているのである。「模倣といふことは、一が多を映すということではなければならない。(...)彼はすべてが極微から出て極微に還ると云ひ、個人といふものをアルファにして又オメガと考えて居る。併し社会のアルファとなりオメガとなる個人といふものは、モノドロ的に世界を映す個人でなければならない。そこに社会がモノドロ的世界の矛盾的自己同一として真の客観的社会であり、逆に我々は無限なる模倣線の焦点として真に個人であると云ふことができる。」(8/354)

あえて言うなら、タルドは西田にとって最も重要な思想家のひとりであった。いかにタルドの思考が西田の思考の中核と連動していたか、本発表では、できるだけ詳細にその点を示してみたい。